

ジェネリックスキルを身につける授業設計 —e ポートフォリオ Mahara の活用—

The Instructional Design which learns Generic Skills -Using of the e-Portfolio Mahara-

田中 洋一

Yoichi TANAKA

仁愛女子短期大学

Jin-ai Women's College

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

Email: you@jin-ai.ac.jp

あらまし：ジェネリックスキルを身につける、初年次教育及びキャリア教育科目の授業設計について報告する。教育方法としては、真正な学習をめざし、e ポートフォリオ（オープンソース Mahara）や協同学習（グループワーク）を活用している。学習効果としては、特性的自己効力感尺度、進路選択に対する自己効力尺度、ジェネリックスキル標準テスト（PROG）、e ポートフォリオ等を使用して分析した。

キーワード：授業設計、真正な学習、協同学習、e ポートフォリオ、ジェネリックスキル

1. はじめに

筆者が所属する仁愛女子短期大学生活科学学科生活情報専攻は事務職（医療事務を含む）を希望する学生が多いため、「ジェネリックスキルを身につけ気配り心配りのできる女性を育てる」ことを2013年度からのキャッチフレーズとしている。そのため、ジェネリックスキルを身につけるための初年次教育及びキャリア教育科目を2014年度から導入した。教育方法としては、真正な学習（田中，2013）をめざし、アクティブラーニング室において協同学習（グループワーク）を実施している。学習支援システムは、授業ポータルサイトとしてオープンソース LMS「仁短 Moodle」、学習成果の蓄積・共有・リフレクションの場としてe ポートフォリオ「仁短 Mahara」を活用している。2つのシステムは Moodle ネットワークを使いシングルサインオンで利用している。学習効果は、特性的自己効力感尺度、進路選択に対する自己効力尺度、ジェネリックスキル標準テスト（PROG）、e ポートフォリオ等を使用して分析する。

2. 初年次教育

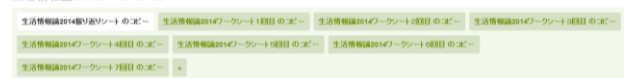
初年次教育として、専攻必修講義科目（1年前期）である「生活情報論」の内容を見直し、河合塾と株式会社リアセックが共同で開発した PROG に基づき、授業を設計した。

- 第1回：ガイダンス、現代人に求められている能力
- 第2回：情報収集力（演習、グループワーク）
- 第3回：情報分析力（演習）
- 第4回：情報分析力（グループワーク）
- 第5回：課題発見力（演習）
- 第6回：課題発見力（グループワーク）
- 第7回：構想力（演習）

- 第8回：構想力（グループワーク）
- 第9回：表現力【書く】（演習）
- 第10回：表現力【書く】（グループワーク）
- 第11回：表現力【話す】（演習）
- 第12回：表現力【話す】（グループワーク）
- 第13回：表現力【話し合う】（演習）
- 第14回：表現力【話し合う】（グループワーク）
- 第15回：実行力（演習）、まとめ

本科目では「問題解決のためのリテラシー強化書【講義編】及び【演習編】」という2冊の教科書を用いており、演習の授業回では前もって【講義編】を学習してもらうように指示している。2015年度からは筆者が制作した動画やスライドを用いて反転授業を行う予定である。

生活情報論2014シートのコピー



共有・編集 (p1302)

生活情報論2014の振り返りノートのコピー

第1回	第5回
<p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p>	<p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p> <p>4/10 生活情報論の振り返りノートを作成しました。</p>

図1 仁短 Mahara ワークシート例

演習やグループワークを実施する際は、Mahara 上にワークシートとして入力し、受講者間で共有している。たとえば、グループでブレインストーミングし付箋を用いてマップ化した成果物は、後日 PDF 化し、ワークシートに挿入している。2015年度からはタブレットを用いて撮影し、学生自身が Mahara に

アップロードする予定である。また、授業の最後には、毎回 Mahara 上に「振り返りノート」を記述させ、リフレクションを行っている。

グループは 4~5 名ずつ 8 つに分けている。学籍番号が近い学生の関連づくりのため、前半 8 回は学籍番号順とした。後半 7 回は、コーチング流タイプ分け「簡易 CSI (Communication Style Inventory) テスト (鈴木, 2002)」を用いて、コントローラ、プロモータ、サポータ、アナライザが混在するようにグループ分けを行った。



図 2 仁短アクティブラーニング室

3. キャリア教育

キャリア教育として、専攻選択演習科目 (1 年前期+学外研修) である「キャリアプランニング」を 2014 年度新設した。専攻の常勤教員 6 名が最低 1 回担当し、2012 年度から実施している学外研修を 4 回分として組み込んだ。

- 第 1 回: ガイダンス, キャリアとは
- 第 2 回: ジェネリックスキルテスト
- 第 3 回: 働く価値に関するワークショップ
- 第 4 回: 自己分析 (自己 PR をするために)
- 第 5 回: 女性の働き方について
- 第 6 回: 国際理解
- 第 7 回: ジェネリックスキルの振り返り
- 第 8 回: ネットリテラシー
- 第 9 回: 名刺作成
- 第 10 回: 企業研究
- 第 11 回: 社長に学ぶ
- 第 12 回: グループワーク (質問紙作成等)
- 第 13 回: 学外研修 1
- 第 14 回: 学外研修 2
- 第 15 回: ワークシート作成, グループ発表

ジェネリックスキルテスト「PROG」を実際に受験した上で、自分の弱み・強みを理解し、2 年間の行動計画や自己 PR を作成する。教員は自分の専門に基づき、働く価値観、自己分析、ワークライフバランス、企業研究等を担当する。前期最後の回には、地元の社長によるセミナーを聴くことにより、働き方や生き方のヒントを得る。学外研修は、北陸テク

ノフェアにて、グループごとに企業ブースをまわり、名刺交換 (前期に作成)・インタビューをして、報告書にまとめることで実践力を身につける。

学習支援システムは、ポータルサイトとして仁短 Moodle, 振り返りノート及び報告書の共有として仁短 Mahara を活用している。

筆者は 15 回のうち 5 回分 (第 1~第 3 回, 第 7 回, 第 11 回) を担当しており、働く価値に関するワークショップでは NPO 法人「日本キャリアカウンセリング研究会」の「はたかちカード」を用いている。

4. 自己効力感

自己効力感の測定としては 2 つの尺度を用いた。

1 つは成田ら (1995) の「特性的自己効力感尺度 (23 項目, 5 件法)」, もう 1 つは浦上 (1995) の「進路選択に対する自己効力尺度 (30 項目, 4 件法)」である。特性的自己効力感尺度は学習による点数の変化が少ないため、「キャリアプランニング」の 1 回目にもみ測定し、進路選択に対する自己効力尺度は 1 回目と 10 回目に測定した。1 回目に実施した 2 つの尺度による相関係数は 0.53, 特性的自己効力感尺度の平均値は 68.56, 進路選択に対する自己効力尺度の平均値は 76.64 である。また, 2 回とも測定できた学生の進路選択に対する自己効力尺度に関する 1 回目の平均値は 76.96, 10 回目の平均値は 77.53 である。平均値は増加したが, t 検定による有意差はない。有意差がないのは, 20~30 点も減少している学生が数名いることが要因として考えられる。

5. まとめ

ジェネリックスキルテスト (PROG) は 1 年後期末に再度受験するため, 正課及び正課外の活動により学生がどれだけジェネリックスキル (リテラシー及びコンピテンシー) を身につけたか, 分析する予定である。生活情報専攻の 2 年間で身につけるべき学修成果をルーブリックにまとめ, 質的データの直接評価であるパフォーマンス評価 (ポートフォリオ評価) と量的データの直接評価である客観テスト (ジェネリックスキルテスト: PROG) でアセスメントできるように計画している。

参考文献

- (1) 成田健一ら: “特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—”, 教育心理学研究, 第 43 巻, 第 3 号, pp.306-314 (1995)
- (2) 鈴木義幸: “コーチングのプロが教える「ほめる」技術”, 日本実業出版社 (2002)
- (3) 田中洋一: “真正な学習を目指したプログラミング入門—e ポートフォリオを用いた協調学習—”, 第 38 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp.235-236 (2013)
- (4) 浦上昌則: “学生の進路選択に対する自己効力に関する研究”, 名古屋大学教育学部紀要, Vol.42, pp.115-126 (1995)